ユスト高山右近
殉教400年

いま、降りていく人へ

我が国の歴史は、四百年前の戦乱に明け暮れた下剋上の時代、
誰もが己の力と才、そして謀略をもって
上へ上へと登り詰めようと鎬を削りあう戦国の世に、
一枚一枚と重い鎧を脱いでいくように、
一人黙々と降りていった人を記憶しています。
ユスト高山右近。
それはあたかも、人間の姿で現れて僕の身分となり、
人間と同じ者になられた
キリストの様に。

「流罪に処せられる間に死ぬ、または牢屋の難儀を耐え抜いて死ぬ。
そのほか、いずれの場所にあっても辛労難儀の道により死ぬことはマルチリヨ（殉教）である」（『マルチリヨの心得』）

聖人・福者を記念することの意義は、神がその人びとを通して行われた救いのみわざを思い起こすところにあります。聖人・福者を通して示される神の救いのみわざを思い起こすたびに、キリストに従って御父に到る道とは何かを、いっそうよく知ることができるようになるからです。「マルチル」とはキリストを証しした人のことを指し、初代教会当時から、信仰のために流罪に遭い、そこで生命を終えた人をも、教会は殉教者と見なしていました。日本の教会も早くから、流罪に遭ってその地で生命を終えた人は殉教者であると教えていました。ユスト高山右近は、織田信長・豊臣秀吉に仕えた代表的な戦国大名として広く知られています。激動する時代の波に翻弄され続けたかにみえるその生涯、しかし、右近自身は、確固とした信仰者へと成長し、神に与えられたその名（ユスト＝義の人）のごとく「神への義」を貫いた人であると言えます。右近を通して神が日本の教会になさった偉大なわざに思いを致すとき、私たち自身の生き方に、そして現代の教会の行く手に、光明を見いだすことができるでしょう。

信仰と生きざま

幾多の試練を生き抜いた殉教者

カトリック高槻教会

1573年（元亀4）、右近は、隠居して宣教に献身したいとする父・飛騨守の意を受け、21歳で高槻城主となりました。翌74年（天正2）に高槻の天主堂を建立すると、領内におけるキリシタン宗門は、かつてなきほど盛況を呈し、巡察師ヴァリニャーノを高槻に迎え、盛大に復活祭が行なわれた1581年（天正9）には、高槻の領民25,000人のうち、18,000（72%）がキリシタンでした。

右近の生涯は試練の連続であり、追放に追放を余儀なくされたものでした。地位も名誉も、国も栄達も失う中で、右近が選び続けた道は、キリストの福音に従う生き方でした。秀吉の伴天連追放令（1587年）で領国であった明石六万石を失い、小豆島や肥後などに隠れ住む日々が続きます。1588年に、ようやく加賀金沢の前田利家に客将として迎えられました。金沢での26年もの長い年月、教会と社会に奉仕する模範的な日々を送りました。しかし、最後には、徳川家康の禁教令（1614年）によるマニラへの追放を甘んじて受けたのです。右近はマニラに流罪になった当初から、殉教者として尊崇されていました。追放され流浪の生活が続く中にあっても、右近は揺らぐことのない確固とした信仰を生き抜きました。

現代は相対的価値観に支配され、信念を貫いて生きることが困難な時代です。右近はこのような現代の人々に、気骨ある生き方を示してくれます。人生にかかわる重大な選択を迫られた時、彼は福音を何より大切にする生き方を、身をもって証ししたのです。いかなる困難にあっても福音に従って生きる。日々の葛藤の中で神の愛に応えて信念をもって生き抜く。これこそが愛の証、現代の殉教なのです。

時と共に成熟した信仰

右近は戦国時代という難しい時代にあって、受洗後も多くの試練に遭遇しました。和田惟長事件（1573年）、荒木村重事件（1578年）に始まり、秀吉の伴天連追放令による領地返上、江戸幕府の禁教令による国外追放から、異国マニラの地で主のもとに召されるまでの生涯は、まさに試練の連続でした。それら一つ一つの試練を乗り越えるごとに、右近の信仰は成熟していきました。試練は大きな決断を要求します。これを繰り返すうちに、確固とした信念が右近のうちに形作られていったのです。右近が信仰を深める1570年代から90年代にかけて、日本の教会は「教会の教え」（カテケージス）を浸透させることに力を注いだ時代でした。右近の信仰の深まりは、教会が教理指導を深めることと密接にかかわっていった努力の、一つの大きな実りでもありました。

右近が受けた様々な試練

和田惟長事件（1573年・元亀4）

17歳で高槻城主となった和田惟長による高山父子の謀殺未遂事件。この時の戦闘で惟長は致命傷を受け逃亡先で死亡。右近も首を半分ほど切断するという大怪我を負いますが奇跡的に回復し、一層キリスト教へ信仰を深める契機となります。

荒木村重事件（1578～79年・天正6～7）

1578年（天正6）、右近が与力として従っていた荒木村重が主君・織田信長に謀反を起こした事件。村重の説得に失敗し、父友照とも意見が対立した右近は、城主を辞し、紙衣一枚で信長の前に出頭し恭順を示しました。右近の離脱は村重敗北の大きな要因となり、右近は事件終結後、再び高槻城主としての地位を安堵され、4万石に加増される異例の措置を受けました。

伴天連追放令（1787年・天正15）

豊臣秀吉が発令したキリスト教宣教と南蛮貿易に関する禁制文書。これにより多くのキリシタン大名が棄教する中、右近は信仰を守ることと引き換えに領地と財産をすべて捨てることを選び、以後26年にわたる放浪と追放の日々が始まります。

禁教令（1614年・慶長19）

徳川幕府によるキリシタン禁教令。加賀藩前田家の庇護を受けていた右近は、国外追放を命じられ一家とともに金沢を退去。長崎から内藤如安らとともにジャンク船でマニラに向かい、2度と日本の土を踏むことはありませんでした。

荒木村重

織田信長

豊臣秀吉

徳川家康

荒木村重　© Manga Designers Lab/a.collectionRF/amanaimages
徳川家康　© Paylessimages, Inc/amanaimages
織田信長像　Photo : Kobe City Museum / DNPartcom
豊臣秀吉像　Photo : Kobe City Museum / DNPartcom

キリシタン大名として

教会の柱石

自分のためには何も残さず、気前よく生きる人の理由はイエスの福音です。
神のことばを礎にした人生はぶれることがありません。
右近は宣教師 ルイス・フロイスが記した「日本史」の中で「教会の柱石」と呼ばれ、
徳川家康の動向を記した「駿府記」では「伴天連の大旦那」と呼ばれています。
2つの呼び名は教会の仲間内と時の為政者たち双方から見た右近をよく物語っています。

教会の「良心」として

キリシタン時代の教会の指導者たちは、外国から日本に来た宣教師たちが大半を占めていました。それだけに彼らは、日本の社会、文化、政治の状況を的確に理解しようと努めました。しかし、言語や文化の違い、個人の能力、時代的制約などが重なり、必ずしもそれに成功したとは言えません。1586年、当時の日本の教会の責任者であった司祭たちが、秀吉の巧みな話術にはまって政治的発言をすることを苦々しく見ていた右近がいました。あるとき、右近は、宣教師が武装した速い船を持っていることを知り、秀吉がどのように反応するかを心配して、それを秀吉に贈るように忠告したと伝えられています。これらはほんの一例です。このように、右近は教会の指導者の近くにいたために、教会の方向性を見極め、かじ取りをする上で大きな役割を担い、いわば教会の良心になったと言えるでしょう。また、右近の影響の下で育った人々は、日本各地に散ってそれぞれの場所の教会の中心人物となり、日本教会全体を生き生きとした方向に向かわせることに成功したのでした。

日本人の司祭育成にかけた右近の
情熱・安土のセミナリヨ（初等教育機関・小神学校）

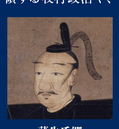
1580年、日本人の司祭・修道士の育成を急務と考えた、イエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父は、天下統一をめざし、安土に壮麗な城郭を築城した織田信長に、セミナリヨの建設を願い、安土に土地を賜ります。これを知った右近は早速建設資金と労力の提供を申し出て、わずか1か月のうちに3階建てのセミナリヨが完成しました。完成後も右近は、セミナリヨで学ぶ神学生を、キリシタンの家臣の子弟から選抜して安土へ送るなど、建設から神学生の発掘さらには運営と維持管理まで、様々な形でセミナリヨの発展に貢献します。教会が成長するためには、ヨーロッパの宣教師だけでは賄いきれないと感じていた右近には、日本人の司祭を育てることへの特別な思い入れがありました。しかし2年後、本能寺の変のあおりを受けて安土のセミナリヨは無残にも焼失します。焼け出された司祭と神学生を引き取った右近は、高槻にセミナリヨを再建すると、越前北ノ庄から戻った父・ダリオを管理者にあて司祭養成を続けたのです。

日本文化の中に花開くキリスト教を目指して

右近は、千利休（1522－1591）の七人の高弟（利休七哲）の一人であり、千利休を含め、彼の多くの弟子たちにキリストを伝え、何人もの人をキリスト教に導きました。当時の宣教師の一人（ロドリゲス）は、右近の茶室は祈りの間であり、茶を饗しつつ友と人生を語り、信仰を語ったと述べています。右近は、茶の湯、さらに書道、絵画、詩歌と多才な能力を発揮し、日本文化とキリスト教を融合させるべく努め、それに成功しました。それは、右近が福音の真髄をしっかりと理解し、それを自分のことばで語ることができたからです。

大坂の新しい教会における信仰と友情

1583年、天下人となった豊臣秀吉は大坂城を築きます。大坂を中心に天下が動くことを予測した右近は、何はさておき大坂に教会を建てなければこれからの宣教が閉ざされると考え、これに前後して堺に教会建設を進めようとしていた神父たちを説得し、大坂での教会建設許可と土地の提供を願い出るよう進言します。この予測は的中し、秀吉は天満橋付近の見晴らしのいい2,000坪もの土地をオルガンティーノに与えました。大坂に壮麗な教会（南蛮寺）が完成すると、右近はすぐそばに自らの館を建て、諸侯や貴人を教会に案内したり、教理を説明したりして宣教に努めました。伊勢国で2万5千石を領する牧村政治や、後に会津100万石を領することになる親友の蒲生氏郷らを信仰へと導きます。氏郷の古くからの盟友である黒田孝高（如水）や、利休七哲の一人、瀬田掃部も洗礼を受け、古田織部も右近を通じてキリスト教に深く感化されました。戦国の世に新しい時代を切り開こうと志した武士たちが、右近を通じて同じキリストの弟子として新たな世を創ろうとしたのです。



蒲生氏郷
西光寺蔵、福島県立博物館提供

南蛮屏風に描かれた教会（南蛮寺）
Photo : Kobe City Museum / DNPartcom

伴天連の大旦那

右近の霊性

誠実にして賢明

「ごたいせつ」の心を実践

右近の霊性の最大の特徴は誠実さと賢明さであり、彼に調和のとれた教会感覚をもたらしました。戦国という時代にあって、右近には決して人を裏切らないという定評がありました。右近は信頼できない武将であると訴え出た者を、秀吉はしかりつけたというエピソードも残っています。彼の誠実さはだれもが認めていたと言えましょう。彼の誠実な人柄は、多くの人々の信頼を勝ち取りました。その人柄に引かれて、たくさんの武将が教会の門をくぐりました。彼は憶病であったと後世の一史家が述べている例もありますが、それは彼が賢明に物事を判断したことの証でもあります。その賢明さはいろいろな機会に顕現しています。不賢明に政治に介入しようとした宣教師をいさめたのは右近でした。調和のとれた教会感覚とは、極端に保守的になったり、極端に進歩的になったりすることなく、教会のあるべき姿を保ち続けることを身に付けている状態を指します。

キリシタン時代、信徒たちは「ごたいせつ」を大事にしました。「ごたいせつ」とは神の愛（カリタス）を意味し、当時の教会はその実践に力を注いでいました。右近は父ダリオとともに「ミゼリコルディアの組」に属しました。これは、貧者や病者など、当時、弱い立場に追いやられた人々の側に立ち、彼らの救済を目的とした信徒の団体です。右近と父ダリオは、当時の高位の武士が決して手ずから行わなかったこと、たとえば死者を葬り、貧者を救済するなど、差別をなくすわざに励んで領民を驚かせました。彼らの生活は模範的であり、それが人々の共感を呼んで宣教につながりました。右近は人を治める者でありながら、「人はみな平等」という福音の視点に立つ治世を実施しました。右近の信仰は実践的であり、とくに貧しい人々を慈しむ心は為政者の基本と心得ていました。人の上に立つ者として、慈しむ心、「ごたいせつにする心」を何よりも大事にしたからです。

右近の信仰を支えた「イグナチオの霊操」

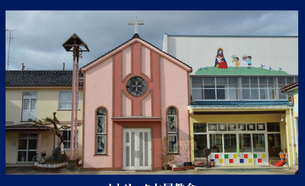
右近は秀吉の追放令を受けた1588年に有家で、また家康の禁教令を受けた1614年、マニラにわたる直前の長崎で、どちらも人生の大きな節目にイグナチオの霊操にあずかっています。「イグナチオの霊操」とは、イエズス会の創立者の一人、イグナチオ・ロヨラの霊的な体験から生まれたイエズス会士養成の指南書です。霊操にあずかった人は自分のすべては神からいただいたもの、だから最後はすべて神に返そうとします。追放の「降りていく道」をたどり始めた右近は、霊操を行うことで、単なる隠者としてではなく、一人の夫であり、父親であり、信徒であり、日本の教会の一員としての自らの使命と向き合い、全てをささげて、召された道を歩み続ける決断をしたのです。

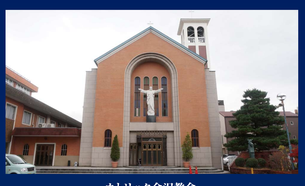
イグナチオ・ロヨラ

燃え尽きることのない信仰の炎

勢いよく燃えるものも、やがて燃え尽きるのが自然の理です。
しかし確かに燃え尽きないものもあります。
燃え尽きないのは、神がその心にふれた証拠です。
右近の燃え尽きない「信仰の炎」に触れた人々が、次々と教会共同体を誕生させていきます。
石地にも花を咲かせる神は、ご自分のあとを慕い、
降りてきた右近を通じてその計画を推し進めるのです。

「神父がそこ（金沢）へ行ってみると、ユストはその一家と共にキリスト信者らしい生活をしていたので、人々は彼の善徳を高く評価していた。僅かな日時の間、百二十余人の武士に洗礼を授け、その中の十二、三人は肥前殿（前田利長）の重臣である。」（パジオ神父の書簡）
右近は「信仰の炎」と呼ばれていました。炎は近づくものに飛び火し、清めます。蒲生氏郷、黒田孝高などの大名をはじめ、高槻の領民約２万人、明石の領民約３万人も、右近を通して信仰を得ました。右近の国替えや追放は、いつも教会の誕生と発展へとつながります。高槻から始まり、明石、金沢、能登と右近が移り住む先々で教会が誕生し、共同体が成長していきます。その土地で右近の信仰の炎に触れた人々が、中津、小倉、熊本、大分、会津などで次々と教会を立て、信仰共同体を作りました。その意味で、右近の数度にわたる追放は、実に摂理的であったと言えるでしょう。


カトリック七尾教会


カトリック金沢教会

「彼の遺書は老トビアのそれのように孫に対する忠告であった。なかんずく、感動的な訓戒をもって、模範的なキリシタンであれ、そしてパードレに従うべしと勧めてあった。そして彼らの中の一人でもこの点において違反することあらば、もはや孫と認めない、とあった。」（モレホン神父の証言より）

孫たちに残した右近の遺言には、何よりも肝心なのは信仰を大切にする家庭を築くことだとの信念が表れています。また、それが守りきれなくなる事態が起こることを予測しての右近の切々たる思いでもあったのです。実際、高槻城にあったときも、明石から追放されたときも、右近は、家族とともに行動することを貫きました。同様に金沢からマニラに追放されたときにも、家族全員でという原則を崩すことはありませんでした。それは、家族の絆をつくるのは信仰だとの確固たる信念があったからです。キリスト者の家庭であっても、親が自分の子供に信仰を伝え切れない現状に対して、右近の生き方は、家族の絆、家族に息づく霊性の大切さを伝えています。

マニラでの最晩年の高山右近

イエズス会報告や宣教師の報告で有名人となっていた右近は、マニラでスペイン人のフィリピン総督ファン・デ・シルバをはじめとしたマニラ市民から熱烈な歓迎を受けた。

「私は、妻、娘、孫たちについては少しも心配していません。彼らも私もキリストのために追放されてここへ来ました。彼らの愛と、ここまでついてきてくれたことを私は重んじています。これから先、主が彼らにとって、真の父親となると信頼していますので、何ら心配はしません。」（モレホン神父の記録より）

信仰に支えられた家族の絆

右近ゆかりの地

信仰と殉教の足跡

能登七尾

前田家の客将となった右近は、その知行地として与えられた能登に、新たな信仰の拠点を築き、共同体を育てていく。

加賀金沢

秀吉の命令で前田利家預けとなり前田家の所領・加賀国金沢へ。利家の手厚い庇護のもと以後26年間を前田家の客将として活躍し、金沢に宣教の拠点を拓く。

大坂

天下人秀吉のもと、新たな時代の信仰の中心と位置付け、大きな期待と共に建設に尽力した大坂南蛮寺(教会)。

播磨明石

小牧・長久手の戦いを経て、四国平定に武功を挙げた右近は、播州明石の地に 4 万石を拝領し、新たな信仰の拠点として明石教会を建立。

安土

その建設から運営、発展にまで心を砕き、情熱を注いだ安土セミナリヨは、本能寺の変のあおりを受け、天下一の巨城・安土城と共に灰燼に帰す。

摂津高槻

和田惟長による謀殺計画を未遂でしのぎ、惟長放逐後に高槻城に2万石を領した戦国大名高山氏の原点。

長崎

秀吉の命に反して、信仰を貫いたため処刑され、わが国初の聖人となった26人の殉教者たちの信仰を称える「長崎二十六殉教者記念像」。徳川幕府の禁教令によって金沢を退去した右近は、国外追放処分を受け、ここ長崎からマニラへ。

室津・小豆島

秀吉が突然発布した伴天連追放令によって領国返上、追放となった右近は、盟友・小西行長により、室津を経て小豆島にかくまわれる。

南肥後

行長の勧めで、ひそかに小豆島を脱出。家族と共に行長の所領・南肥後へ。

フィリピン・マニラ

精根尽きかけた航海の末、たどり着いたマニラで、右近一行は、思いもかけぬ歓迎を受ける。要塞砲は一斉に祝砲を放ち、港には聖なる人を一目見ようと黒山の人だかりができていた。しかし、右近はようやくたどり着いた安息の地で到着からわずか40日後、病に倒れ、再び起き上がることなく1615年2月 3日未明,創造主の元へ旅立った。その直前、「わが主を仰ぎに行く」と幾度も繰り返したという。享年63歳であった。

高山右近関連年表

年	出来事
1543（天文 12）	ポルトガル船が種子島に漂着、鉄砲を伝える。
1549（天文 18）	フランシスコ・ザビエル来日、キリスト教を伝える。
1553（天文 22）	彦五郎（後の右近）、摂津国三島郡清溪村高山に生まれる。
1560（永禄 3）	室町幕府、宣教師ガスパル・ヴィレラに畿内の宣教を許可する。
1563（永禄 6）	肥前の大村純忠、洗礼を受け最初のキリシタン大名となる。高山飛騨守が洗礼を受けてダリオと名乗る。 右近、沢城にて洗礼を受けユストと名乗る。他にも、ダリオ夫人、家臣など 150 人が洗礼を受ける。
1568（永禄 11）	飛騨守、摂津守護和田惟政より芥川城を授けられる。
1569（永禄 12）	織田信長、ルイス・フロイスに京都宣教を許可する。
1571（元亀 2）	高山氏、高槻に移る。
1573（元亀 4）	和田惟長、高山父子暗殺を謀る。飛騨守、高山城主に。まもなく隠居して宣教に献身。
1574（天正 2）	右近、高槻城主となり荒木村重に属す。 右近、摂津余野のクロダ氏の娘・ユスタと結婚。高槻に天主堂を建設。
1576（天正 4）	オルガンティーノ神父を招き、高槻で盛大に復活祭を祝う。 同年 8 月 15 日、京都の教会（南蛮寺）の献堂式を行う。
1577（天正 5）	1 年間に 4,000 人の領民が洗礼を受ける。
1578（天正 6）	豊後の大友宗麟が洗礼を受け、キリシタン大名となる。荒井村重、織田信長に謀反。右近、高槻城を開城。
1579（天正 7）	村重方についた父・飛騨守、柴田勝家預けとなり北ノ庄（福井）へ。
1580（天正 8）	安土城築城に伴い、安土セミナリヨ（神学校）建設。
1581（天正 9）	巡察師ヴァリヤーノを高槻に迎え、盛大に復活祭を祝う。
1582（天正 10）	天正遣欧使節がローマに出発。本能寺の変。右近、山崎の合戦で先陣。4,000 石を加増される。 安土セミナリヨを高槻に移す。父・ダリオ、高槻に戻る。
1583（天正 11）	賤ケ岳の合戦。秀吉方で出陣。佐久間盛政に敗北を喫す。大坂城築城にあわせ、大坂南蛮寺（教会）建設。
1584（天正 12）	小牧・長久手の合戦に参加。
1585（天正 13）	根来・四国平定に参加。武功を挙げ、播州明石に転封。明石教会建設。
1586（天正 14）	イエズス会日本準管区長ガスパル・コエリョを伴い大坂城で秀吉に謁見。
1587（天正 15）	大村純忠、大友宗麟死去。秀吉の九州平定に参加。 秀吉の伴天連追放令により、右近の領地没収、追放。小西行長により小豆島に匿われる。 細川忠興夫人玉子受洗、細川ガラシャと名乗る。
1588（天正 16）	小西行長とともに南肥後へ。秀吉の命令で前田利家預けとなり金沢へ。 利家、右近を客将とし、その保護のもと茶人としても活躍。宣教活動へと入る。
1590（天正 18）	小田原攻めに出陣。武功を挙げる。
1591（天正 19）	ヴァリヤーノら秀吉に謁見。
1592（天正 20）	秀吉、朝鮮半島侵略（文禄の役）
1593（文禄 2）	フランシスコ会の宣教師来日。大友義統、朝鮮の役の失敗で改易。
1595（文禄 4）	父・ダリオ死去。長崎に埋葬。
1596（慶長元）	土佐浦戸でサン・フェリペ号事件が起こる。
1597（慶長 2）	長崎で二十六聖人の殉教。秀吉、2 回目の朝鮮半島侵略（慶長の役）。
1598（慶長 3）	秀吉、病で死去。
1599（慶長 4）	前田利家死去。右近、金沢城を修築。
1600（慶長 5）	細川ガラシャ、人質を拒否して死す。関ヶ原の戦い。右近、前田利長に従い、大聖寺城を攻略。小西行長処刑。
1602（慶長 7）	ドミニコ会、アウグスチノ会の宣教師来日。
1605（慶長 10）	金沢に教会建設。
1608（慶長 13）	金沢でクリスマスを行う。
1609（慶長 14）	右近、利長の命で、高岡城を築城する。
1612（慶長 17）	岡本大八事件が起こり、家康の教会不信が高まる。
1613（慶長 18）	伊達政宗の家臣・支倉常長、ヨーロッパに派遣される。
1614（慶長 19）	江戸幕府、キリシタン禁令を発布。右近一家、金沢を退去し大坂から船で長崎へ。 国外追放処分となり長崎からジャンク船でマニラへ。マニラで大歓迎を受ける。
1615（慶長 20）	マニラ到着後 40 日ほどで熱病にかかり、2 月 3 日死去。マニラ市により盛大な葬儀が行われ、 イエズス会聖堂に葬られる。享年 63 歳。